

2. 現在までの研究状況 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述してください。様式の変更・追加は不可(以下同様))

- ① これまでの研究の背景、問題点、解決方策、研究目的、研究方法、特色と独創的な点について当該分野の重要文献を挙げて記述してください。
- ② 申請者のこれまでの研究経過及び得られた結果について、問題点を含め①に記載したことと関連づけて説明してください。
 なお、これまでの研究結果を論文あるいは学会等で発表している場合には、申請者が担当した部分を明らかにして、それらの内容を記述してください。

研究の背景

1990年代以降の経済停滞を背景として、日本においても完全失業率は高い水準で推移している。一度働き始めたとしても、キャリアを中断し無業を経験する人びとは増加しつつあり、これまで安定したキャリアを歩むとされてきた男性にもその影響は及んでいる。社会学、社会階層研究においては、1980年代以降、職業経歴を対象として、時間的な概念を明示的に組み込んだ研究が展開されてきたものの、「無業」については、その位置づけが十分に議論されてこなかった。

無業経験は、それ自体が労働市場における地位を失わせ、経済状況の不安定化をもたらすのみならず、その後のキャリア形成をも不安定化させる現象として理解できる (DiPrete and McManus 2000)。しかし、個人レベルでの格差生成という観点から見た場合、**無業経験がどの程度の不利さをもたらし、その不利さがその後解消されるのか、拡大するのか**、といった詳細なメカニズムはまだ十分に明らかになっていない。

問題点

以上の背景からみて、従来の研究においては、以下の2点が十分に明らかにされてこなかった。

- (1) 無業経験が**その後のキャリア**に与える影響は一時的であるか、長期的に持続するものであるか？
 欧米諸国においては、無業経験がその後のキャリアを長期的に不安定化させ続けることが確認されている。一方で日本では、無業経験の負の影響は確認されているものの (森山 2012)、それが**どの程度の期間にわたって**影響を与え続け、格差を生成・維持させるかという時間的な視点は欠けている。
- (2) 無業経験の影響は**男女でどのように異なるか？**
 従来の研究は、入職してから退職するまで連続的なキャリアを歩む男性と、就業の中断をとともなう断続的なキャリアを歩む女性という対比を前提とし、男女を別々の枠組みで分析してきた。しかし前述のとおり、男性であっても、無業経験によって断続的なキャリアを余儀なくされる者は増加しつつある。こうした背景のもとで必要となるのは、男女で無業経験の影響が別様であることを前提せず、**何が男性(女性)特有の特徴であり、何が男女で共通しているのか**を明らかにすることである。

解決方策・研究目的

そこでこれまでの研究は、無業経験がその後のキャリアに与える影響を、男女を比較しながら明らかにすることを目的とした。その際、従来の研究の問題を克服する以下の2点の分析枠組みを提示した。

- (1) 無業経験がその後のキャリアに与える影響を、**無業経験からの時間の経過に着目**して分析する。無業経験直後などの特定の一時点だけでなく、それ以降にまで時間的視野を広げ、無業経験者と非無業経験者の格差が生成・維持されるプロセスを捉える。
- (2) **同一のモデルを男女それぞれに適用**して比較分析を行う。無業経験の影響はどのように異なるのか、男女で同一の変数を統制しつつ検討することで、男女の共通性と異質性とを浮き彫りにする。

研究方法

以下の社会調査データの計量分析を行った。

- 2005年社会階層と社会移動全国調査 (以下、SSM2005) : 日本国内に居住する20~69歳の男女を対象とし、働き始めてから現在に至るまでの職業経歴を回顧的に収集しており、長期にわたるキャリアを捉えるのに適している。無業経験が職業階級・雇用形態に与える変化を明らかにするために用いた。
- 東大社研・若年壮年パネル調査 wave1~6, 2007~2012 (以下、JLPS2007~2012) : 2007年時点で20~40歳の男女を対象としたパネル調査であり、個人の変化をより正確に追跡できる。とくに無業経験が賃金に与える変化を明らかにするために用いた。

特色と独創的な点

- (1) 男女を同じ水準で比較分析する点。従来の研究において男性と女性のキャリアは別々の枠組みで分析されてきた。対して本研究の枠組みは、男性(女性)特有の特徴と男女の共通点とを経験的に示すとともに、無業経験を**同性内に格差を生じさせる契機**としても捉えることを可能にする。
- (2) キャリア内部のプロセスに着目する点。先に挙げた近年の労働市場の変化のなかでとくに注目されているのは、キャリアの開始時点である初職の影響である。一方で本研究は、初職入職以降の**キャリアの半ばで起こる無業**に着目して、その影響を検討する点が異なる。

研究経過および得られた結果

これまでに得られた主要な結果は以下の通りである。

- (1) 雇用形態に関しては、無業経験は男女とも、その後 20 年近くにわたって正規雇用への就業確率を低い状態に持続させる。ただし、男性の場合は無業経験から時間が経過しても就業確率の上昇は見られない一方、女性の場合は無業経験から時間が経過するにつれて、徐々に正規雇用獲得確率が上昇していく。その背景には、女性は非無業経験者も非正規雇用へと移動していく層が存在するために、格差が縮小していくことがある(研究業績(1)-1.)。
- (2) キャリアにおける地位の上昇・下降を賃金で測定した場合、無業経験はその後の賃金を 16~19%程度低下させ、それは観察可能な期間中(5年間)は少なくとも上昇しないまま持続し続けることを示した。ここでは明確な男女差は観察されなかった。この結果は、欧米諸国でみられた賃金の低下度合い(Gangl 2006)と比較してもやや大きい水準にあった(研究業績(1)-4.)。

ここで重要なのは以下の 2 点である。第 1 に、従来女性特有の働き方とされてきた無業を経験する断続的な就業が、**女性だけでなく男性にとってもその後のキャリアを不安定化させる**要因であったという点である。第 2 に、(1)で指摘したように、無業経験の影響という点でみたとき、**男女で異なる格差の生成・維持のプロセスが存在している**点である。これらは、男性と女性のキャリアを別々の枠組みで分析しては決して明らかにならなかったといえよう。

参考文献

- DiPrete, Thomas A. and Patricia A. McManus, 2000, "Family Change, Employment Transitions, and the Welfare State: Household Income Dynamics in the United States and Germany," *American Sociological Review*, 65(3): 343-70.
- Gangl, Markus, 2006, "Scar Effects of Unemployment: An Assessment of Institutional Complementarities," *American Sociological Review*, 71(6): 986-1013.
- 森山智彦, 2012, 「職歴・ライフコースが貧困リスクに及ぼす影響——性別による違いに着目して」『日本労働研究雑誌』619: 77-89.

3. これからの研究計画

(1) 研究の背景

2. で述べた研究状況を踏まえ、これからの研究計画の背景、問題点、解決すべき点、着想に至った経緯等について参考文献を挙げて記入してください。

近年の社会階層研究では、累積する有利／不利(Cumulative (dis)advantage)の概念が注目を集めている。これは、ライフコースのある時点で有利(不利)な地位にある個人が、時間の経過にもなるとその有利(不利)を蓄積し、格差が生成することに着目した概念である(DiPrete and Eirich 2006)。キャリア形成過程という文脈のもと、**無業経験は、こうした格差生成プロセスを駆動させる契機**として位置づけられる。

無業経験をこのように捉えたとき、なぜ無業経験が人びとの間の格差を生成・維持させるのか、というメカニズムが問われる必要がある。これまでの研究では、無業経験がその後のキャリア形成に長期にわたって不安定化させ、格差を生成することを示したが、そのメカニズムは十分に検討できていなかった。そこで本研究では、社会階層研究がキャリア形成に関して提示してきた以下の 2 つの論点に着目し、無業経験の長期的影響を生じさせるメカニズムを検討する。

- (1) **地位喪失のインパクトと再就職時の地位の年齢による違い**: 長期雇用と企業内訓練を前提とする日本の労働市場においては、特に男性において年齢や勤続年数と報酬の結びつきが強い(Kalleberg and Lincoln 1988)。他方こうした日本の特徴は、高い年齢で職を失った場合の再就職を難しくする。すなわち、**無業経験は、年齢を重ねることで獲得した有利さを失わせ、さらにその後の就業にとって不利にはたらく**ことによって、その後のキャリア形成を不安定化させるものと考えられる。
- (2) **非正規雇用での滞留**: 非正規雇用から正規雇用への移動には高い障壁があることが知られている。ここには、非正規雇用者は企業からの訓練投資を受けにくく、技能蓄積が難しいという背景がある。非正規雇用は無業経験者の再就業に際してバッファとしての役割を有しているが、その一方で、**非正規雇用への入職が技能の蓄積を阻害し、格差を維持・拡大する媒介要因として働く**可能性がある。

参考文献

- DiPrete, Thomas a. and Gregory M. Eirich, 2006, "Cumulative Advantage as a Mechanism for Inequality: A Review of Theoretical and Empirical Developments," *Annual Review of Sociology*, 32(1): 271-97.
- Kalleberg, Arne L. and James R. Lincoln, 1988, "The Structure of Earnings Inequality in the United States and Japan," *American Journal of Sociology*, 94(supplement): S121-53.

(2) 研究目的・内容 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述してください。)

- ① 研究目的、研究方法、研究内容について記述してください。
- ② どのような計画で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に記入してください。
- ③ 共同研究の場合には、申請者が担当する部分を明らかにしてください。
- ④ 研究計画の期間中に異なった研究機関（外国の研究機関等を含む。）において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載してください。

研究目的

本研究の目的は、**無業経験がキャリアに与える長期的影響とそれともなう格差がいかなるメカニズムで生成するのかを、年齢と非正規雇用に着目した男女比較によって明らかにすることにある。**

研究方法

社会調査データの計量分析による。用いる社会調査データは以下である。

- SSM2015, SSM2005：これまでの研究で用いていた SSM2005 調査データに最新の SSM2015 データを加えたデータを構築する。**幅広い年齢層における無業・非正規雇用の影響を比較検討**するために用いる。
- JLPS2007～：これまでの研究でも用いていたパネル調査であり、とくに**若年・壮年期のキャリア**を詳細に分析するために用いる。
- 中高年者の生活実態に関する継続調査、2010 年～（以下、中高年調査）：最初の調査時点で 50 歳以上 89 歳以下の男女を対象とし、2 年に 1 度実施されているパネル調査である。過去の職業経歴を詳細に尋ねているという特長をもち、過去の無業・非正規雇用が**中高年期のキャリア**におよぼす影響を検討するのに適している。

申請者はこれら 3 つの社会調査データの収集・クリーニング段階から関わっており、それぞれの調査データの特性に習熟している。分析に際して、(1)(3)のデータは既に使用可能である。(2)については、これまでの研究と同様に東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターから貸与を受ける。

研究内容

右図は、若年期に無業を経験する者、壮年期に無業を経験する者、非無業経験者について、仮想的に社会経済的地位の推移を描いたものである。本研究では、右図のように、**無業経験がキャリアに長期的に影響をおよぼすメカニズムを 3 つに分解**する。そのうえで、これらのメカニズムを年齢と非正規雇用という 2 つの要素と結びつけ、男女を比較しながらこれを解明する。以下、詳細を述べる。

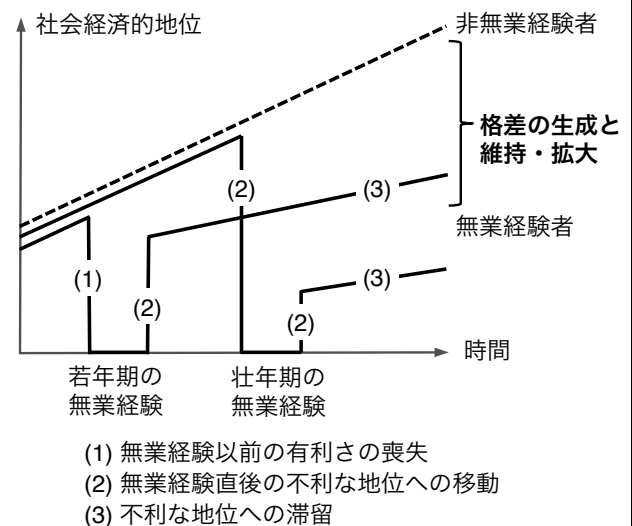


図 これからの研究の概略

(1) 無業経験以前の有利さの喪失

無業経験は、それまでのキャリアで蓄積してきた有利さを失わせる契機となる。その影響は、年齢を重ねて有利な地位を獲得していた者ほど大きいだろう。企業の中核的なメンバーとして訓練投資をなされる男性は、女性と比較して有利なキャリアを歩むが、その分、高い年齢で無業を経験することがもたらすインパクトは甚大になると予想される。

(2) 無業経験直後の不利な地位への移動による格差の生成

無業経験直後は、それ以前よりも不利な地位へと参入することとなる。ここでも年齢は参入先の地位を左右する要因となる。高い年齢で無業を経験するほど、その後の再就職は困難になり、非正規雇用のような周辺的な雇用へと参入するとみられる。男女の違いとして、無業経験が家庭の都合と関連して生じる女性においては、年齢にかかわらず、男性と比較して不利な地位への移動が多くなると考えられる。

(3) 不利な地位への滞留による格差の維持・拡大

無業経験によって非正規雇用へ参入した人びとは、非正規雇用に残り続けることによって、技能蓄積において正規雇用者に遅れを取るようになる。こうした非正規雇用への滞留が、無業経験直後に生じた格差を維持、あるいは拡大する役割を果たすと考えられる。ここで、女性は男性と比較して、非無業経験者も含めて全体として低い地位にある分、無業経験からの時間の経過ともなう格差の維持・拡大の程度は相対的に小さいと予想される。

(3) 研究の特色・独創的な点

次の項目について記載してください。

- ① これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
- ② 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
- ③ 本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

特色と独創的な点

- (1) 非正規雇用を、**無業経験の長期的影響を生み出す媒介要因**として位置づける点。欧米では無業（失業）経験に関して、日本では非正規雇用経験に関して、その後のキャリアにおよぼす影響が多く検討されている。しかし、非正規雇用を無業経験と関連させて論じる研究は多くない（例外として無業経験と非正規経験の効果を比較する Yu (2012) などが挙げられる）。本研究は、これらの研究とは異なり、無業経験による格差生成のメカニズムを非正規雇用の位置づけと絡めて解明する点が独創的である。
- (2) 性別と年齢による異質性に着目する点。無業経験がその後のキャリアにとって不利にはたらくというだけでなく、性別や年齢といった**キャリアを取り巻く文脈によってどのように効果が異なるか**に着目する点が、従来の研究と比較して新しい。

本研究が完成したとき予想されるインパクトおよび将来の見通し

- (1) 政策的には、無業経験がキャリア形成に与える負の影響を緩和するために、無業経験直後と硬直的な労働市場構造のどちらにより政策的な介入を行うべきであることを提示することができる。
- (2) 累積する有利／不利は魅力的な理論である一方、そのメカニズムをフォーマライズしたうえで経験的に検討した事例は極めて少ない（DiPrete and Eirich 2006）。本研究は無業経験を事例としてこのメカニズムを経験的に検討するものである。本研究は、これによって、なぜ人びとの間に格差が生じるのかという、社会科学・社会階層研究にとって主要な問いを解明する試みである。

参考文献

Yu, Wei-hsin, 2012, "Better off Jobless? Scarring Effects of Contingent Employment in Japan," *Social Forces*, 90(3): 735-68.

(4) 年次計画

DC1 申請者は1～3年目、DC2 申請者は1～2年目について、年次毎に記載してください。元の枠に収まっていれば、年次毎の配分は変更して構いません。

(1年目)

研究内容

研究内容(1)(2)に対応する研究に着手する。3つの社会調査データを用いながら、無業経験以前にキャリアにおいて蓄積した有利さがどの程度失われ、不利な地位への参入が生じるか、年齢の効果に着目しつつ分析を行う。また、これまでの研究のうち十分に成果報告ができていない部分については、再度分析を行った上で、学会報告・論文として成果報告を行う。

研究発表

4月：International Sociological Association（以下ISA）の社会階層部会（以下、RC28）の会議にて、これまでの研究内容について研究発表を行う。
7月：4月の発表をもとに、労働政策研究・研修機構の機関紙『日本労働研究雑誌』に論文を投稿する。
10月：日本社会学会大会において、1年目の成果の中間報告を行う。
2月：1年目の成果をまとめ、日本数理社会学会の機関紙『理論と方法』に論文を投稿する。

(2年目)

研究内容

研究内容(3)に対応する研究に着手する。不利な地位への滞留によって無業経験者と非無業経験者との格差が維持・生成するプロセスについて、非正規雇用に着目して分析を行う。

分析の結果は、欧米における無業経験の効果と比較した場合の日本の特徴に焦点を当てながらまとめる。これらの作業によって、日本のキャリアにおける格差生成プロセスが、欧米諸国と比較していかなる特徴を有しているのかを明らかにする。

研究発表

6月：ISA大会にて、1年目の成果について研究発表を行う。
9月：日本数理社会学会大会において、2年目の成果の中間報告を行う。
12月：2年目の成果をまとめ、日本社会学会の機関紙『社会学評論』に論文を投稿する。
3月：1年目・2年目の研究内容をまとめ、RC28の機関紙 *Research in Sociological Stratification and Mobility* 誌に投稿する。

(5) 人権の保護及び法令等の遵守への対応

本欄には、研究計画を遂行するにあたって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続きが必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、国内外の文化遺産の調査等、提供を受けた試料の使用、侵襲性を伴う研究、ヒト遺伝子解析研究、遺伝子組換え実験、動物実験など、研究機関内外の情報委員会や倫理委員会等における承認手続きが必要となる調査・研究・実験などが対象となりますので手続きの状況も具体的に記述してください。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

社会調査データは、特に個人情報の扱いについて嚴重な注意が必要である。各種社会調査データの使用に際しては、その配布機関より承認を得たうえで、これを成果物に記載する。その際以下の点につき注意を払う。

- 個票データは本研究における利用目的での分析にのみ利用し、個々の調査対象を特定する分析は行わない。
- 個票データの秘密保護については徹底して行う。具体的には、データは暗号付き USB にて管理し、Web上のクラウド等にはアップロードしない。また分析は自身の PC を用いて行い、共同で使用する PC 上では行わない。また、本研究の終了後には個票データを消去する。
- 使用許可を得た個票データについては申請者のみが使用し、第三者への再提供は行わない。

4. 研究業績（下記の項目について申請者が中心的な役割を果たしたもののみに項目に区分して記載してください。その際、通し番号を付すこととし、該当がない項目は「なし」と記載してください。申請者にアンダーラインを付してください。業績が多くて記載しきれない場合には、主要なものを抜粋し、各項目の最後に「他〇報」等と記載してください。査読中・投稿中のものは除く）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書（査読の有無を区分して記載してください。査読のある場合、印刷済及び採録決定済のものに限ります。）

著者（申請者を含む全員の氏名（最大 20 名程度）を、論文と同一の順番で記載してください。）、題名、掲載誌名、発行所、巻号、pp 開始頁—最終頁、発行年をこの順で記入してください。

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

(3) 国際会議における発表（口頭・ポスターの別、査読の有無を区分して記載してください。）

著者（申請者を含む全員の氏名（最大 20 名程度）を、論文等と同一の順番で記載してください。）、題名、発表した学会名、論文等の番号、場所、月・年を記載してください。発表者に〇印を付してください。（発表予定のものは除く。ただし、発表申し込みが受理されたものは記載しても構いません。）

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

(3)と同様に記載してください。

(5) 特許等（申請中、公開中、取得を明記してください。ただし、申請中のもので詳細を記述できない場合は概要のみの記述で構いません。）

(6) その他（受賞歴等）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書

1. 麦山亮太, 「キャリア形成プロセスにおける格差の男女比較研究——無業経験に着目して」東京大学人文社会科学系研究科社会学専門分野修士学位論文, 2016 年. (査読なし)

2. 麦山亮太・吉川裕嗣, 「東アジアの学生の意識にみるアジア統合の展望——アジア人意識と脅威認識を軸として」園田茂人編『アジア比較社会研究のフロンティア III: 連携と離反の東アジア』勁草書房, 231-255, 2015 年. (査読なし)

3. 麦山亮太, 「在宅療養／施設居住にはたらく世帯構成と経済状況の影響——柏市介護保険レセプトデータを用いた計量分析」安藤絵美子・目麻里子・黄銀智・長谷田真帆・松本博成・麦山亮太・荻野亮吾・木全真理・福井康貴『柏市における要介護高齢者の在宅療養継続に関する研究——家族関係と経済状況に着目して』東京大学高齢社会総合研究機構, 11-28, 2015 年. (査読なし)

4. 麦山亮太, 「企業間移動が賃金に与える持続的影響——無業経由の有無と男女の違いに着目して」『2015 年度課題公募型二次分析研究会 パネルデータを活用した就労・家族・意識の関連性についての研究 研究成果報告書』東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブセンター, 2016 年 5 月末印刷予定. (査読なし)

他 2 報 (いずれも査読なし)

(3) 国際会議における発表

1. 〇Mugiyama, R, 2016, "Attitude Mapping of Asian People toward Integration in Asia: Regional Similarities and Differences of Asian Identity and Threat Perception," International Workshop, Changing Attitudes of the Students and the Future of Asia: Analysis of Asian Student Survey Integrated Dataset, University of the Philippines, February 2016. (口頭発表、査読なし)

他 2 報 (いずれも口頭発表、査読なし)

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

1. 〇麦山亮太・目麻里子・木全真理・福井康貴, 「要介護高齢者の施設入所選択にはたらく世帯構成と経済状況の影響に関する計量分析」『第 74 回日本公衆衛生学会総会』, 長崎新聞文化ホール, 2015 年 11 月. (ポスター発表、査読なし)

他 1 報 (ポスター発表、査読なし)

他 2 報 (いずれも口頭発表、査読なし)

(6) その他

1. 海外派遣, 東京大学大学院人文社会科学系研究科 "The University of Auckland English Language Academy" (アカデミック英語集中講義), 2016 年 3 月.

2. ティーチング・アシスタント, 東京大学文学部「社会学特殊講義」(社会調査土科目 C, D), 2016 年 4 月-2017 年 1 月.

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説 (5) 特許等

なし

申請者登録名 麦山 亮太

5. 自己評価

日本学術振興会特別研究員制度は、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的としています。この目的に鑑み、申請者本人による自己評価を次の項目毎に記入してください。

- ① 研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等
- ② 自己評価する上で、特に重要と思われる事項（特に優れた学業成績、受賞歴、飛び級入学、留学経験、特色ある学外活動など）

研究職を志望する動機

どのような社会現象においても、そこでは中心にある人びとと周辺に置かれる人びとが生じる。申請者は、こうした中心と周辺との分断、周辺への排除がなぜ生じるかに関心を持ってきた。こうした関心を持っていた申請者にとって、社会における格差・不平等を研究対象とする社会階層研究は、人びとを分断する過程そのものを対象とする魅力的な分野であった。人びとを分断する社会構造を、社会調査というデータによって読み解く作業は、寝食を忘れるほどの知的興奮をもたらす活動であった。こうした活動を、知的興奮を超えて学問への知的貢献へ、そして社会を形作る人びとへの発信へと繋げるためには、研究者となるのが最も適切であると考え、研究職を志望するに至った。

目指す研究者像

申請者が目指す研究者像は、国内外の社会階層研究に関する広い知見と深い洞察にもとづき、現代社会の格差・不平等をめぐる諸問題の構造を明らかにすることのできる研究者である。研究においては、理論と実証の往還関係を意識し、データと誠実に向き合い、厳密な論証を心がけ、社会学・社会階層研究に対して知的に貢献できるよう尽力する。また研究活動のなかでは、自身の研究成果を国内のみならず国外へも広く発信していくとともに、実証的な研究成果をもとに政策提言へとつなげていくことを目標とする。

自己の長所

- (1) **広い知的好奇心**。申請者の主たる研究分野は社会階層研究であるが、それだけでなく社会学周辺の様々な分野に興味を持ち、知識を得てきた。研究業績欄に示す通り、さまざまな分野で成果を産出していることがその証左である。
- (2) **計量分析の経験と知識の豊富さ**。本研究で使用する職業経歴データは、通常の一時点データと異なり、同じ回答者の同じ事項について時系列的に連続した測定を行なった系列データであり、その取り扱いや分析が難しいことが知られている。申請者のもつ研究業績はいずれも計量分析を用いた報告・論文であり、これらを通じて申請者は計量分析に関する経験と知識を得てきた。こうした知識と経験は、複雑な職業経歴データを用いた本研究の遂行にとって役立つ。

自己評価する上で、特に重要と思われる事項

- (1) **数多くの社会調査プロジェクトに参加**している。とくに、本研究で中心的に使用する3つの社会調査プロジェクトにはいずれも深く関わってきた。
 - SSM2015：2015年社会階層と社会移動調査研究会に参加し、実査・データクリーニングの過程に携わった。また研究会にて2度にわたり自身の研究内容を報告し、日本の社会階層研究の最前線を担う研究者との交流を通じて自身の研究を前進させている。
 - JLPS：2013年、2014年とデータのコーディング、クリーニング作業に参加した。また、同調査データを用いる二次分析研究会に参加し（業績(1)-4.）、データの構造にも習熟している。
 - 中高年調査：2015年よりデータのクリーニング作業に参加し、職業経歴を含む複雑なデータの論理エラーの修正を行っている。
- (2) 修士課程の初めより**計量分析に関する自主的な研究会を組織運営**している。本研究会は、研究科の垣根を越えて学内・学外から20余名の参加者を集め、活発に研究報告・勉強会を行っている。これにより、組織運営能力、研究者同士をつなぐ能力を身に付けている。
- (3) **国際的・学際的な研究活動**を積極的に行っている。国際的な研究活動としては、業績(1)-2.や(3)-1.に示すように東アジアの国際比較研究に参加し、その成果を国内外に向けて発信している。また、将来さらに研究成果の国外発信を積極的に行うため、業績(6)-1.のように海外での英語学習の機会を作り、準備を進めている。学際的な研究活動としては、業績(1)-3.や(4)-1.に示すように、医学・公衆衛生分野の研究者らとの共同研究を行っている。加えて、修士課程より博士課程教育リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」に参加し、自身の研究領域の意義を他の学問領域との関係から捉え直す経験を積んでいる。